

鎖園論

地

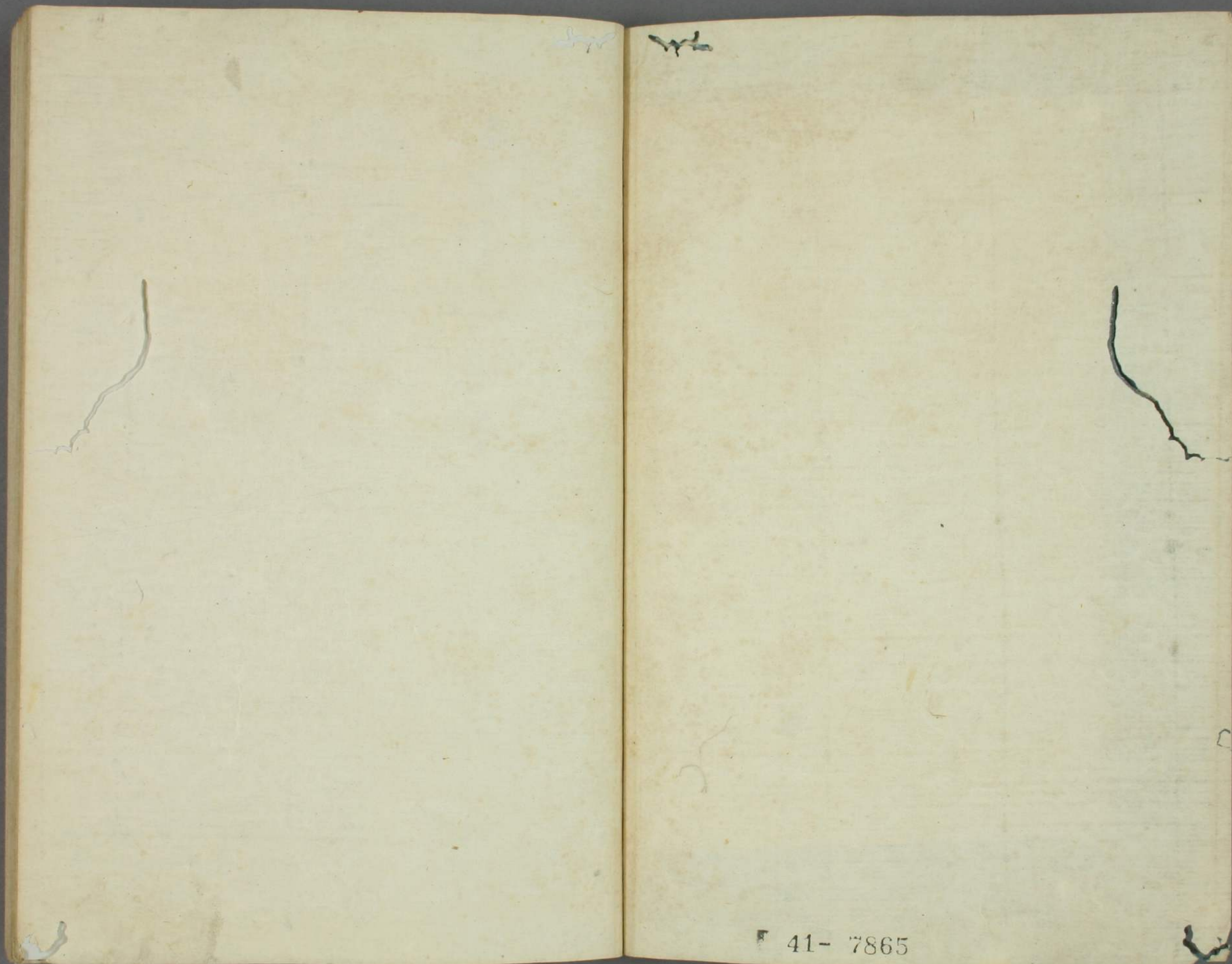
洋学文庫

文庫 8

C 213

2





F 41- 7865

鎖國論下



極西檢夫尔著



初免日本外難より来り 砌ハ必と教
 百年に及ぶ國苦のこゝ多切なりと
 國中に諸島を分散し多ハ海辺寄
 る所の魚類を以て其生を養ひたり
 有ふん 檢夫尔本より我々の人を
 難難よりよりれ来れり 神武帝思
 慮謹慎容顔高貴るる君より大堅口ニエリス

歌羅巴羅媽城
と建立り王

と同時なりりる始て日本に

國基を立たちひあり辭の恭き譯
者の意はなり故よ是

其の年曆此小肇あり其以前國權
如何なる人けきに在り當時の人憚怠
ありて其事及び開必以前に值遇見
ずち一兩れりとも全く記さるがや今
其史記に在りても考る所なる事実に
知るなり日本室初の後帝治承の頃

上世の如くして世界の中へ此玉のそ食
居住の地なりりて極く親睦多福なり
りりり

天照太神の嫡にお兼け正統神孫名流
なるを以て高邁なりてみづる神明に
肖りし道を扶る小廣大莊嚴を以て
て群下を以て尊敬して人倫の教ふ
非とすすめを生むむむむ此の

後世よりなり、遂に國事、開通國粹、
徳の治を以て、大なる弊となりぬ、何
んぞ、んか、神聖絶倫の名を、帝
王は、其群下、恭礼の衆を、御さる
可く、溫柔寛裕のみを、以て、治さる
能く、既に神明を、以て、王臣の一族と
し、又、宗教を、以て、神明の如く、御す
し、世々民事の、統御を、自己の御手

よか、あらん、其位は、較きは、卑下なる
業、も、いふ、れ、是、も、耳く、世間の
人、委任、し、て、其、道理、なり、是、も
の、故、より、も、この、後世の、流弊、増、え、
より、其、族の、勢、も、盛、なり、帝、奉
事、も、其、勢、と、棄、擲、し、諸、侯、亦、
帝王所任の、別、郡を、以て、自立、し、
其、君、たる、のみ、を、以て、其、君、も、有、り、心

と纏ふ―別に武芸製作發明の後、至
りて、彼等者、口を収めて、果ては、所創の地、
り、追あるん、其流弊、後患、如何、
なり、けり、と、せん、是、内、外、の、
を、失、ふ、もの、幾、何、と、あり、名、族、は、滅、亡、
せ、さ、る、の、幾、何、と、あり、一、何、と、
す、れ、心、ま、う、土、地、兼、併、の、心、を、起、ふ、
拳、勒、と、や、怖、る、か、り、ん

案、々に、後、世、に、害、を、
氏、家、王、法、佛、法、世、間、出、世、を、
別、も、あ、も、古、く、王、者、の、
り、て、二、法、を、
さ、も、我、族、の、人、を、
と、知、る、が、皇、國、後、世、の、
起、る、を、と、怖、る、者、を、

る、もの、なり

事其形勢既_レ斯の如く_ニあり_テ後
の放恣氣侮_ノ心と制_シて降服_セむ_カ
れ_ル時_ニ多_クなり_トれ_ハ可_ク將軍と_スる_ニ官軍
の首_ヲて遣_スへ_リと_テ帝の長子即
皇太子と_ス人_ヲ以_テ定例_トて是_ヲ定_メ勝_リ
主職_ニ補_セられ_ルあり_ト是_ヲ遊_シて世間
治_メる_ニ民_ノの基_ヲと_スる_ニめ_ル其_ノ故_ヲ也_ト
治_メる_ニ民_ノの基_ヲと_スる_ニめ_ル其_ノ故_ヲ也_ト
百_ニ年_ノの_ニあ_リる_ニ將軍_ノ新_ニ帝位_ヲと_スる_ニめ_ル

望_ニに_テ強_クて自寛_ムと_スる_ニ世_ノ事_ノ實_ニ上_ノの_ニ權_ヲと
以_テち_テる_ニ日本_ノ記_ノ事_ヲ書_キと_ス是_ノ人_ヲ以_テ
ウエー_ニレ_ニト_ニレイ_キケ_イツ_ル世_ノ間_ノ帝_ノと_スる_ニめ_ル
の_ニ弟_ノと_スる_ニめ_ル
り_テ然_レと_スる_ニも其_ノ後_ノ人_ノ於_テ良_ク久_クハ_リ出_テ世_ノ帝
其_ノ後_ノ人_ノ於_テ良_ク久_クハ_リ出_テ世_ノ帝
か_ノ神_ノ體_ヲと_ス宗_ヲと_スる_ニめ_ル何_レと_スる_ニも世_ノ事_ノ
第一_ノの_ニ權_ヲ柄_ヲと_スる_ニ軍_ノ師_ヲと_スる_ニ重_ニ任_ヲと_スる_ニ出_テ世_ノ帝
の_ニ所_ノ欲_ヲの_ニ人_ヲと_スる_ニ授_ケら_レる_ニと_スる_ニめ_ル然_レと_スる_ニも

十六世

西暦の年曆より十五百年より十六百年まで
より中間五十年をとり十五百年は明徳九年

にあつた初め頃在職なりき將軍其事業
と超えて一挙に奉上の勢と棄絶して自立
して世に官上の君となりぬ其事業も
重大なりて容易なるはしく思ふるにその
難渋のするもなりて成就しぬ此將軍は帝
れ二宮原文より
宮の義なり出せば法より於て帝位を
継ぐと成行されども然るに權勢は心解

執事なりて強く軍中に自立して悉く
父帝に世事の権柄を奪ひかゝる物なり
唯々の神體なりひ神道の勢なり國神
正統の神孫なり先規をばりて以て教
へ傷めんとありき

然るに斯る程忽不憚の挙初め遂に
小ありて終るは其國に利益なり其時
將軍偏は一箇治統の基を居るなり

して遂に大いに國の幸福安泰を改と
の助となり殊に斯うな西復及運を好
むれ俗を禁ずるの所要となりぬ本より
かく不法ぶて得たる爵位なりれど
や何てかの強暴来逼の輩を鎮めて和睦
安堵せむる堪へざる程に数多強大に
諸侯誰より是を憎み是を爲し開戦
一歳と前連て辛ひあり良久して福

禄爵位雖も一箇無双の英雄秀吉後太
閤と稱せり大器完智人より歸りぬ是
人を微續奴僕の境界より起て自己の
勲功謀畧より宇宙最大の徳者
世の一人なりぬ此大改革のるに千五百十
三年^{天正十一年}の以て商の末より謹慎の名
よりあらわれより本國當時の形勢
諸侯兼係の志ありし者民の氣質

昔嗜好所歟を廓知し是よりての
唐代將軍家計患しちて免るを
自ら官上の權をえりて至る人と欲
大家の放恣兼保の心を制し其強大自
立の勢を削りて狭小の度内に屈せし
むるの術をばふふありて能く人々を
知まり是れ是れ人々ありても至極の要
なり討策なりあるれども能く

見てゐるなりは徳教多ありあるなり
等々としてい遺し一並れりるもの大事
は太閤在世の間は能くすゝ才智者多し人々
成し得るは非ざるを以てなり此は南なり
実にもその事を挙げて成熟の時に至
りぬめ何なり玉中強大の徳候多し既小
降服し其餘は互の戦争にありて頗る衰
微し何なりは亦も敵對をるはるなり

何れと幾程なりて是等々を
兵勢謀畧ありけり故なり

初々諸侯の放恣兼保の如しと追ふ
増長して終よ、世帝も殆ど制すべ
堪さるゝ至りにけり、以来帝頻り
は御子を將軍として大軍を首りて
をいさるゝ既、四百年の久きを経
あまたも皆徒らなり止り、終るを今太閤

は僅、十年の間なりて其功を成就し、
是唯、其威を以てす、けり、何れ
其心謹慎なりて、良策を用たり
より、終るに時運亦よく其心に
を祐り、諸侯の兵勢、其甚き内亂、
よりて頗る敗廢し、終るも終るを
制する處あり、是は、太閤心を一決して
其隣なる海、必、其理、正しく日

本小属すきとひくひを討てん欲を
此のころ決定す本意は玉中強大の
侯と遠隔し其所の郡所を城に
りおさん為し又彼等かの海
國なる韓韃人韃靼人とも韃
靼の郡ともを降さん
時と移し問ふも自己の他の志を成
就し今勝るなりわづ國權を堅固
小すきれば宜十分なる事とせん必

定まりし知るなり然るも自餘の事
は皆隨意に行はれども言蘇征伐
れ計と期しことと快通なり
程は漸く思ふに諸將を誅ひ
んと欲し此時諸將既よ國を去る
方なり戦役の艱難を經り大に疲倦
し城室涸竭し兵力敗廢しこれ
疑ふるなり今もや此逆の心を搦る

は物を以て重くして如何なるべき
價にも何處苟も不飲あ物を買ふを
欲するを太閤より禁じて苛き制
度を立てたり其制度はか敷難儀に殆
の時の最も身體安全の爲なりといふを
辨して徳侯の妻子を都へ遣して
留て是より適宜なる館舎を構て
莊嚴なり堅固なり坐する城中より

居住せしめ徳侯帰國の上は本邸に附き
毎年廻りの時を定めて都へ來りて
妻子をも訪てしむる太閤既し斯の
しく苛刻の一流を用てむ家の治法を
新しめられ徳侯兵勢衰へ威風落て
將來天下其隱謀る途のるよを去て
少く恐るゝ事あるべしなり如何と
なりし徳侯皆其妻子を以て其心腹不

変わる所の質をすつたが、必毎年一廻
かつゝ都ありて其心をもこの名を
表せざるや能されざる其才車残
の上平より起り幾何もあるや併多
け強大の徳候と成事なりむるはあれ
るに誠は離倫絶類の規模と謂つて
徳候の兼係の志強大は勢常より民
靜謐帝王安全の爲は損あり害あり

あつと一旦大なるを破りつては遺を
るに民の放縱なりして王綱の太害なり
とんとを撤（悉）むべきの時を遂に亘く一種の
新法を遂へ愚民多民の歎多民の歎は家範
立ては徳黨一和せ
ざるを悉くしり乃蟬起掲擡は備へ革業
の權威を固くすきふに何りや此時新
王帝に付運よき一帝ありけれは是を
く國家の體範群下の心服小適中せ

んて男子の法度皆く創作せらる
て我はより今其法度の厳猛なるこ
とを案ずにかのアラ子人けいもやう
く此よりいふに當るは但一タラークル厄勒祭
一タラークル厄勒祭の號とせやう考ふるは後
は是の書くもの墨を以てしるし血を以
てし類とも偶つては是の早免れは法
度猛るりやうとて然も明ひ守るに
難き所あるも何に早免れ國家

万民の治平を進めたりい治平を進む
るに適宜なるんと思ふも改をさるんは
け外きに他の所期あるに何に況や
まゝに慘刻嗜殺の本意を以て制作す
るかの古の名も暴君デイヨ子イニス各
う象魏をより遠く人目の及ぶ所を
無て人よりなりて讀るべからず
此よりして犯者益く多しと得ず

教と云ふものの数大なる小なるを以て或は
ちゝあるを謂ふもやれ日本法度の猛
なりき罪を罰と云ふ偏に於ては
すゝと世にありされ帝命は遠く
人もの身躬は罰を受け死を受け
外に看赦の形何れも聞かぬ
の法度は至ても徳侯大家の如き貴人
は其過罪よりして或は一箇の爲に流

され或は命を以て自教する等の如き
り實に其性日本人の如きものに其法
斯の如きものに制御する能く
其人は其國法を以て貪者の爲に
設て富者の如きは是を買ふて或は
已りの及ん所を徳罪其意は徳を
犯すこれ極く治道は害ありて且
又至る不道なり事なりと此言を

た理ありし謂つ——我多し此世の跡次
に在り毎にかけ召令け有國法の趣を
玉中小告をせん爲は大道の傍より
さへに其心を構て置置るれのを
見^{檢夫亦よく我文を}_{讀まはあはれ}其文法の簡約ふ
して群下の爲居き所ありひるむ
さふのさふは直に大意のみをいひて
其辭の極て寡きは警ぬ何等の故なる

て此めきの法を作きりといふことも記
せに能く作者の布衣なるひは其趣を
も説き上犯者の南風の刑の次第とを
示さし此世の公け者なるものなり此
大なる玉中の耳く然る事ありし謂
たり案々に凡俗令の文は然る趣をな
さんものなり好曲しきる居るの理を
作者よく知れり然るに簡約なりし

既また多きなりを上に諸罪を罰とす
極く極くして金く法を犯と者少
あれ、其より大悪心より起る人も又も
恵の情より起り、安田の理は幸あり公
らと罪を犯とにあらんも一切差別なく
悉く死罪なりしす、國々れ凡法度と
犯さん若し刑も所とす、このより一人
伴くあつたものやくす、又能くは莫^モ

斯哥比亞の大ヘルトク

大ヘルトクは爵名なり王爵の
次なりヘルトクの上は公侯は位を

ヨハン子スバジリデス其の群下と仰するに鐵鞭

と云す、常言なりと正しく日本

人のあやを謂ふものなり

ストロイスといふ者、
莫斯哥比亞の事

と犯すを思ふに
ある彼の法の極

され、斯のや、法を放縱

の民は蜂起を止し、件多し刑罰お陽りて

治法極別なるに在ても一齊に安靜和平を

遂めて、兼て國中、諸君諸集を

も果しむるは必と斯く厳法猛刑ある
べきなるありあるに無窮くあるに日々
法候の時あり威儀を呈すに厳重
言をあるす其人も憂を懷きて
既してひるはる所権威を遂て永
く群下の扶戴はいつくんとやひ
毎に彼等の便宜を失ふこと我思ふる
る能くある有りあるに吾人皆平生將受
と收ひ方黨を好めり若大い心をぬひ
て彼勢力を破り此の放恣を制する
べきに其患を免るに

アテ子シダラークの事アテ子シダラーク
ルトウ羅向書は厄勒祭重け時の大
都より羅鳩^{ロウゴ}の時の羅鳩城の如
くしてあり又アテ子シダラークの
テイラシ又アテ子シダラーク

なりしより何りテイランに惨劇なり
暴君をいり又カローと龍をいふ
やと龍を兎人の譬としするは是
を其故を以て厄勒黎王時代の暴君
に歸するべしと血書せる故事あり
予當分なりしは載籍に之を
見しと近來左記の蘭人にも傳説の
者なりれ少く俗に遠きもの同しと

とも答ふる能はば是故に暫く疑を
なすは後人の改訂を待たぬ之莫斯科
比亞のより元來歐羅巴同盟の諸王
より有る熱ル島泥比亞國と帝より拂
郎斯國暗厄里亞國のやうなるコウラン
と云ふと王爵より意太里亞王のト
スカ子と魯細亞國のモスコビヤとの二を大に
トクしやり莫斯科比亞今ハ強大なり

魯細亞帝と稱せられとも舊きより仍て
莫斯科比亞大ヘルツォグもとり凡天下
に於て和蘭を全く許してケイツル帝
とすゝものあり我天子公方支那の帝
都トルコ見格のモウルタン和蘭ありてゴローテヘルル也
稱を大君と言んや
魯細亞のカサル和蘭ありてゴローテホルスト
稱す大主と言んや
印度私當の卧尔和蘭ありて大莫卧
尔と稱す
泥亞ケイツル和蘭語の帝
號即是なり

其中支那莫卧尔都兒格の三
王ハ韃人の 後より熱尔馬泥亞魚細
亞ハ二王ハ羅媽人の後之大同既より國
事を然く堅固長文の世に居て後人
其徳に從て人々を安んじて千五百
八年慶長三年ハ薨りぬ極て睿知謹慎なり
君なりて死後には國神の中に列して
シハチマシと言へりハ幡々軍神の名

なりし統多し其國に幸なりたるかのオシガ
シヨの國號を継ぎひちたにりありたるオシ
ガシヨ後よりイハヤス公より名を蒙後よりオシ
シヨ號をトクシカハの名族より出まりし事
太閤隆政の實をまゐり一子承賴としし時より
年六十なりしを化しし其補佐しし中
檢夫尔自註曰秀賴後より
爵位よりひき承命を承る尔来其子孫連綿
しし常より必し其謹愼を承りて洪福を交

ふお扶て治を成し而ん職名君の其業
をもち其職跡より後ひて造法の嚴猛
なるを奉りし凡國中の諸侯大家を
しし怖畏しし服従節度の宜しき誠
意より先んて勢力を增長しし國家安泰
のよく堪ふべきの限よりあつたに王たるが
しむる事是なり其治も洪福の王たる
の才一け所帯するも歴世徳君たりし

之理を智し物進みし王事と以て
是を雇するも兵力を恃み是を
もたすも主戦と以て是は任とす
りて之より親を有る礼を厚く
—王者たる所の徳を示し物力と
諸侯の親睦を慕はんとすは
但し其事を安んずるを寛治と
すは所以と即ち其の調和

とす所以なり其言爵を授くる所以即
かたつてその綱羅せらるる所以なり
爵位恩恵の類の諸侯に賜ふものと
—寛治を以てせしむるは此
こそかたき聽命服事之心を固く—又かの
領代所税の貸付若し聚り積らる
兵乱の逆の心を起さしむるは
恐何れものを快く出—費さるるを

るりや何と云ふに依原大を好む故に
より端々之恩恵爵位の上に臨み
必し其成儀花更やうい資料を増し
し貴族を致し其身の養ふに在ても貴
族多かりむ國に於ても毎年系附け
政中に於ても斯くも是よりして若
く保より成勢強大の實に悉く失せ
て僅に残るる蔭を頼り自奉自慰し

て苟も満足するれをたり右の外無救に
奇計奇術あり或は諸侯より常に
お通文にお伺ひやめ或は旁て其極
密の秘話を窺ひて其家なる非常計事
を知り或は和をとり睦をとりめ又或
は時の利害よりしては不和を起し怨を
起しむる數の多し毎季すくは違ふ
に諸事の中に轉りも別心を用らる

と徳川の勅諭よりい其正税の書信を
得るにあり新家の徳臣其勢をなされ
忠良志実の程をみるにあり出家なる
もの行状よりい其趣向を察し別て
は其中も権貴れもの所爲をなす
あり國中刑罰裁断のよりいあり
覽し又徳川の書よりい決断をな
しよりいありを檢するよりい其既

漸く一定して其俗常に轉起る途より
むの習よりいあり國中今其志希
るよりいふたれい又かの外家の事思く
い他よりいあり國內の騒動をみるに
たれいあり世よりい拒絶するを以て極て功
用せしむるよりい是儀も従前既成
所よりいありいよりいあるを挙るにあり
さうきふれいあり新成の治綱の福を

項上の極極より終る恭平を
益々安んずるに先ありて供事皆堅固長
久の基より居んと欲とこれ皆ケイツル
將軍の思慮明鑑の同断ありんを
要とあり終令後来めある強亂の
事何んとも後人かの経歴家の地を氣
運の負よりなりと一より人同界の毒常
の危は尚まりといふなる所を以て安んず

其責と人主より悔地急悟しと謀
果不足なり罪より出たりとせん欲に
とも其田よりめんとも凡異なる候
式異なる風俗土人の外より移り来ん
も異國人の市中に運入せんも皆國中城
内より移り来んものなりと一カイルト
縣博より小紙馬より今の俗カイルトより即垂人
の俗より移り来んものなりと一カイルト

穀子 此方の實 テウエーケヘクト お國の義なり代
ト同し と文にけ二人

闘ふなり即ち劔勝負なり但し彼方の志劔勝負
に較べ期やに切傷せられて屈服せざるを期と俟
客又いふ少年好色の憤りあつて衣服飲食に
よりて多くこのやあり
俊奢るる其代徳の異なる荒淫の業皆
こそ善良中正の道を傾ずるの障礙なり
こゝ吉利支丹教法の如きと極めて尚今
一定の治道國家の和平に害あり本國の
教法に害あり其神佛に奉るは勢に害
あり世帝天子と云ふの神威職掌に害あり

と云ふ本國異國其人互に往來し逗留
するも万民の静謐に害あり是は皆彼
に本國の性質より生ずる異化なる
趣向を育成するものなり是は善國なる
ところなりあつて國俗の弊令にあらざる
免まざるも又ハ將來其思あつても悉く
異化風俗の起るなりは能くいへども凡そ
體を挽早しや本然の壯健は復せしめん

思ふ人より其の害を断ち去る
は何れに依る計策なるか根柢
を以て有らん限に其害の止んを
望んも固陋なる業なりは

是故に國が當時形勢に求むる
頃より一定に其の治綱の求むる國民享
福安養の求むる土地の性求むるケツ
ル安全の求むる悉皆一切に國を鎖し

全く異國人異國風を除くふあり是故
とてケイツルなる執政家終に二決
して永久不易の法を以て曰國當鎖
閉凡異國人の中は至て大は日本小固
膠しこれに害をなす甚きもの
波^{ホルト}ル^カル^ル若し其に此俗傲慢
なり日本は劣らぬものなり彼等
是れ倭土

揆夫尔自註曰此は偶然なやうな事艘の
海船風暴にあひて是國の國は漂来

中によりより千五百四十三年の頃の

しるし譯者曰千五百四十二年、天文十二年この後幾

程あるかに現前の利は偽りもれ大に豊民

小植民

人を植る事彼等が玉の如きなり
人を其地は後して住まむをいふ

且

異域奇貨により且る使節を遣りて悦

法する所の耶蘇經の教より且る新化の

者より婚を通するによりて暫時のるる大に

る富を致し一掃く國人の心をほり大に

の利益より一決事の如きなるるは新

の余り敢て本意を逞ししては玉の如き

を所よりや変革する所あるふなりし大に

民の抑心凶惡の端を榮えより極て南今

家は害しするぬケイヅルの殊に幾あるは

しりあるは二書の面より計克はした

るよりその何れより其一通は和索人の意

しりあるは

洋中より波多利の船
を奪はるよりしてなり

和索人

當時波多利杜瓦人より戦争の際なりける

其上交易れ便宜を古人と希ふ故あり

又其一通は廣東より日本人が得てき

はるなり 何處もは方の城役は彼等 廣東に支

那の邑の名ありあり其はも國家に

害とあるべき委曲の事とも教多同なり

露顯るは執政家の事と諸侯臨政ふ

於て二人の耶蘇の官位も遇さるに彼

僧も遊りて恭敬の礼を拜ひて肯く

國人平生に極る準せはとも頻りに朝廷

は祈らる 彼僧轉より 又土俗異なり新なる

を好むよりて波爾杜瓦ル人莫大の

利を得るは量計の効を運輸に在るは

事漸く公儀の患するなり又吉利支

丹教の盛は行する新化の役の合する

る彼等本より神佛あり本國の教

法を忌嫉むて其法の為は他を御さ

自を獲る堅固なる事、是皆能國家に
恐懼不安の基なり是等既明なり
され、許多の艱難を経、又許多の命
を絶て、近き以て、國中、徳侯の誓
を破り、帰降せしめて、久き以來、主
を荒廢せしめ、内亂の強を、もて、終ふ
は、一統の世なるを、若し、吉利支丹を
其侯より、置て、其教増加するに、至り

是も、再の新は、禍亂の根柢を、とり、な、逆
れ、時を、は、ゆる、甚慮するに、なり
斯の如く、數々、重要なる事、あり、より、て
太閤漸く、波爾杜瓦、尔、貨利、増長、吉支丹
信心、弘通、の、る、に、於て、隙限を、立、られ、り
凡、鎖國の、一件、も、一旦、より、成就、する、事、不
あ、ら、む、と、多、年、を、強、き、れ、ハ、能、き、と、く、見、え、
ら、る、故、に、所、求、する、も、る、より、太閤

死せしきけり故に後人よ是を哀しめて
其事を成就せむ皆あるに懲戒刑に
以てせり。其後高麗、波爾杜尾、人其
俗俗のよみ祝族通婚の故に族あり此
方にてはつる妻をとりと
伴ひて國を退去す。是より日本の土人將來
恒る其中に土著し、當時現る國外にあ
らん者、一定けし節を期して歸り來てく
若し其期を過ては、異國に在るやん

その同刑を以て是を罪す。是事あるに
吉利支丹教を奉せんもの、立而て誓言紙
をて改めざる者、是なり。是皆至極に
難路を經歷するに堪えられ奉る成就を
爲す。さる事あり。なり。御す。日本一統の主
をねんとして、許多の肖像者吉利支丹小對し
て其方人をとり
の血を流し、是を今も、國體を固めん、
吉利支丹の血を流し、に、是を、元

よりかの教化の位何れも道理を説のそ
りては廻心もなきにあらずを以て力及
微索烈火磔架等の加へき教言戒を設
て彼等より其罪を悔し曉悟せし
めんといふ所よりか最嚴極なる所置
らありなりとも又まづも慘刺なりある
獄吏の發明する種々可責の具とあり
あれし彼等信受凝結の心少しも動揺

せはあや中々に其位心の虚るを
とはかの血を以て磔架の銘をんを
て憐れむを以て教をき望固不拔の氣
象を見りて其教たる人をうよこも伐
刃て警歎するふあり是又けし人々
なる血を以て
りかくと異教の爲に民心を棄れられ
永く是を必し肖像がけ耻辱せしめ
つゝ凡そ右にかく古今重罰の極極苛

刻を以てしるる大約四十年の間なりイエミ

ツ公薨御後大猷院ノ號ヒビデヌ公 夫檢

尔自注曰薨御後ノホ世子にノイエヤス公ノ檢
台徳院ノ號す

伊孫なり此君ありし終る明は鎖國の
るを奉り此類るも極烈の氣象を以て
三万七千余の勤来る使僧るまで理は
放て害る事とこそ思ひたりやめとかれ
日本の船庭より示は所の象魏の面小

逆ひて國中に入来せん謀ふの罪
科を免る事やあるける程は使者
と使者と其數六十二人ケイツルの嚴令小
よりて斬罪せしむる唯我の宮も車錢
る奴僕僅に數人 都令七十三人の内十二人即令
出たりぬしとり數して由國より免其國の人
斯る強猛なる應對に遇ひし音信を告
るべきを以てしむ

當時我國人を遠惑せし南蛮人
と波爾杜瓦爾人のことなり何れに
伊斯巴泥亜人もありかし波爾
杜瓦爾は比とれは其事小なりて
且又別は異なるものなりは斯
畧也とのなり是二國皆和蘭に
南方にありて各々王長ありて別
なりといへども密にお隣りて殆ど一

國のみ其あなとも伊斯巴泥亜
といふ殊に其頃にも波爾杜瓦
爾・伊斯巴泥亜は麾下なり
故に我と通商等の事とも伊斯
巴泥亜より信見せしものとあり
東方にありて伊斯巴泥亜は呂宋
と果元と波爾杜瓦爾は臥亜城
と果元とに於て和蘭の咬端あり

即亞細亞敢國中其大城なりき波
爾杜尾ルヤ亞媽港と和蘭の臺灣
ありき如し何處も我國に近き
なり今と二所皆支那の地なり利
波爾杜尾ル人古に外に甘巴費
魯謨斯とて印度の大城兩所を押
領し居たりかとも是も今に甘巴
費と莫即ルと取られ恩魯謨斯

ハ泊爾奇亞國と取らるぬとてり
波爾杜尾ル我國と交易せり
檢失ル金書を案ずル其言は曰く
交易前後盛衰ありといへども其全
盛なりし時年々運輸する所は
金三百トシより二トを以て大抵其失
利ありを知るべしとてりト各今の
文報より大約四百貫目なり三百

あさ拾貳万貫目なり又いづく其
利の富ふるも運來運去の貨
物各一倍となりて其より四加倍の利
あり又曰千六百三十年寛永十三年船四
艘より銀貳万三千五百貫外を輸
去は諸人私の銀此のあり羽三年
六艘より貳万千貳百貳拾貳貫六百
五拾四匁一分又其翌年小船貳艘

より千貳万貳千五百五拾貫貳百三
拾七匁三方を輸せしより妻々々
彼方けるを記しるものも檢失
尔見たりしより原文もは拾匁を一
タイルヤとしり但し此の銀々今れ
文銀とは異なり古け三年は彼
交易衰微の極をとり又いづく其
全盛なりし時のやうなり頻小

此年をたし強たふほくおて日
本より亞媽港へ船を討宝れ積
かの古れ撒刺滿大王の時サロセンは如德亞ジュニア
城中に在し金銀は適しとて
しとより撒刺滿は三千年より
前より王の名なり此を希なり
富れ譬よ引るものなり但し
に言教拾貳万貫文と正金銀の

みをとり此はおての貨物
とより

和蘭國の印度交易家より幾十七世に
初の頃より常は日本に通商に千六百
千七百年より其人の正直なること初来は
後平生日本人のよく知らしめ既し高
時國家は依る波爾杜瓦人より不聖
るれとより近き頃有る吉利支丹を還

の事小能くも其志明く見ゆる海上
多く大鏡を發て城
を撃たりと有り

ナミに爲るる小敵猛を

以てせん事波尔杜瓦ル人と同一かん
は勝つとも不直とも謂つても殊ふ
はケイツルより許容け書二通を賜りて
通商隨意たふせし折々しちり初のち
六百十一年^{慶長}ケイツルイエマス公より賜り
又のち十六百十六年^{元和}二年^二かた即跡を継ぐ

るヒデタ公より賜るる物まゝ和蘭人
事に於て須く規矩を立ちの術なり
はあつたふにち長崎の港内は
あつた波尔杜瓦ル人のあつた勢なり
周圍とも謂つて其所を以て和蘭人
將來の住宅とすといふなり是れ國を
一めんも強ふるにふれといふ放縱
置人もあつたふにち是にち

彼等常に許多の監者の官府に折衝盟を
し、かれら亦、其鎖細の事をさへ、密く
知り、戒め、或、掌帳の者、其苛き、檢察を交
て、實は、囚俘も、其質人は、殊に、不惑も、
え、る、唯、ふ、か、ま、つ、注、進、より、して、其、國、他、別
の、勅、諭、如、何、と、知、り、ま、し、れ、お、給、ひ、更、に、因、る、さ
る、の、や、ま、し、れ、其、所、置、け、痛、く、強、き、に、堪
ふ、處、を、程、の、り、ゆ、り、あ、ん、と、彼、は、併、て

毎年、五、十、万、コ、ロ、ン
コ、ロ、ン、は、銀、錢、の、名、なり、一、コ、ロ、ン、
文、銀、より、大、約、ハ、又、小、なる、故、に、
十、貫、目、斗、り、二、の、貨、物、を、賣、り、し、て、或、は、ち、む、但、し、
が、あ、ま、し、き、り、て、日、本、人、も、和、蘭、の、貨、物、を、り、て
と、あ、ま、し、き、り、る、と、思、ふ、人、も、實、は、は、誤、り、て、
謂、つ、つ、和、蘭、より、一、年、に、入、る、亦、の、額、布、け、
數、の、や、ま、し、き、り、日、本、人、も、は、僅、に、一、七、日、の、間、に、
て、出、つ、つ、其、他、阿、比、菜、龍、腦、木、香、を、
い、種、の、乾、菜、并、多、の、貨、物、を、賣、り、し、て、修

奢け為りて茶餅の為よりと云け茶は和蘭の
葉を焙じて
之を丸めし
て
和蘭人葉をくとも日本の憂とるるふ思ふと云ふこと
檢夫亦よりと云ふこと斯りと云ふこと

右に文は和蘭人をさうと云ふこと
彼とのといふこと檢夫亦元來熱心
京島尼亞國の産るれ熱心馬尼
亞を上都逸國といひ和蘭を下都
逸といふ和蘭人の集りて老ふ事
に文銀四千貫目ハ元禄頃の銀よりハ

三千貫目よりと云ふこと檢夫亦全
書中に貞享二年新親の銀言成
三千貫目といふこと原文は三千貫目といふこと
ありタイルは拾ふなり
出鴻は南蛮人市中に居るといふ事
止よりたる故寛永中三十年小
築出ると記録を見たり檢夫亦四二
通の謀書けることと云ふことは波多利尾
亦大なる國禁はるるに似て出

諸君居んと今和蘭人の如く

支那人を日本人の諸君藝能學術をも傳
授し現より其地盛なりとて教法をも
授し其地を以て其上治國の法も頗る驚
く模範を以て成範とされ更にもの
恩を擔つる所なる故に一切異俗拒絶の
列に於て是よりして惣て交易の
隨ふに維細き先づき但し定て長

崎より来りて他港に入らるる

わが斯の如く許容せざるもの唯ふ

支那のみにあはしかの支那小官等

粗君に取れ一時の變あり其の人乃

逃去散り至る所の東方

諸代諸王國

支那人の郷導に

の說法支那國は行客せらるる時あり

彼日本は持来りて賣る所は書譜の中に
漸く此吉利支丹の教を解して耶蘇を
信する所は誠然なるを文へ来りて是を以て
此等民安靜の道に害あり損ありて
近き頃より種々の艱難を経て終る退治
し此等教法を更なる再ひ蘇生せしめん
やとありて其事大に日本朝廷に憂
とありし程に決定して是を戒むる事

和蘭人は同く其戒む所の法も又殆どお
同しきに取らぬ唯はお同きれども其に彼
等と知恵を以て日本人の儀計を拒み防
ぐる和蘭人よりそ劣る物々に又彼等
名を怖く支那人より種々の國策
住る者たるれり力を竭してお妨お害
せんとい其上等牆貪慾なりや何るる利
小ほありし中より辱を蒙るも失さる

んことを欲せり

吉利支丹教法許容の事始て支
那國は披露あり一十六百九千
二年といへりト云子ル人コウラニドル
ク出見てより此を檢夫尔後其の
後二年にあり然るに許容を披
露より前せりある一國又曰吉利
支丹教支那あり二流なりて一

流は儒を難て孔子を尊り祖考を
祀りてを許し一流は儒法を忌み難
てよりる小儒を難たゞ其の殊丹
布國より禁止せり又儒を難する
もの其後終て支那帝は命よ
りて支那國を治る故に吉利支丹等
に惑ふもの希なりといふ

事既し斯の如くなりて王り國家全く鎖

開すくまふりおあれ、今二物をりて帝王
の所期所行に於て妨をるはきまのあま
り、大家皆よく御降ぬ道は其兼併有る
の思ふきまもろく、万民皆能一定ぬ道に其
強梁放縱のあまきまもろく、異國の高き儀
をかへ援をるもの労もろく、許し異玉
に通好すは常もろく、恐て異國の流風
を受けるは患もろく、一切手足を累もろく、是

怖ものなり、是に於て快く其切なり
とす、所の多を理め、かの開道の國出入
交易惣さる地、能くさるもの多を計り、邑
阜材産諸職の官舎諸人の會所及び互
の肆をさる、造るは極密の格式は順
めて舊習を移し、新風を化せ、め各自
に産業を示し、法則を立て、是を慕く
これに賞し、下民を勤励の心を起

才能を成就し、有為の事を發明せし先
又能く許さず、監者居て眼目を強し民
れ挙動を察せしめて是を以て其奉上
の宜き心を失せし先各々を以て心を新
にして善多きを勸免行し、あつて一國を奉て
礼儀作法の学校し、るる人々欲も斯めと
くして世間主れ功を以て上世の無急有福
の體を恢復し、國中内礼の意多きか

く境域の秀勝不双なりし群下の強勇
世欲なりしに委任し、異國の人毎く
他の榮を見し羨慕嫉妬の心を懐くこと
残残み惡のり實し日本を以て洪福を以
る仇の怨もなきも、外國來朝の意多
きも、琉球蝦夷、藤原の辺傍
の諸島對馬佐渡八丈の
めきをいなり何事も日本帝を尊て

君長し、せり唯彼支那、實し強大し、國小

して支那人日本人の當りて惡き惡ひ
あつたといふも然る彼人の形類の計畧
よくつゝるき者やが、尚今治世の帝は
難艱の種なりといふも既々許多の謀
地は五國を統御するの重任あるに對し
そ亦所保の地を推して日本はなるべし
殆ど終にそのおは違ふはあらずといふ
今もむしは支那人といふも日本人の怖る

海系事なり日本國尚今の世間位は具

りまやゆッナヨシ公

檢夫尔自注曰嚴育院家綱公
の御子台法院の御孫

極て謹愼として又大に謀畧あるを
り御先祖世々の英公英臣を承継し殊
小寛仁に勝過より密くも國法をもち
りひ弘夫子の學に成長し、も域内を治め
る國體民生の求る所を應ん人氏にも
ありて福祿を受繁榮をとり合體同公

してお親睦し、学ひ侍り神明と学む
軍國法と奉ふと云く君長に順ふ
軍一同僚と愛敬する軍一礼あり忠
有り良有り又能勤励万玉又秀出せり
官務の境域一居あり玉中に於て三市
交易して富と致せり富余不足あり生
計の具饒多なり統のなるに和平靜
謐の澤と文とあり俗令共人歌を廻りて

佳古民生楽なりけし時を察しとも
或は又太古事跡の記と取て序編とも
必と云ふれぬ意連綿福縁満足あるか
るんの時と表さるるを悟らん御
小称望の事を以て一切異俗通商通
好の所小保護鎖関せり

鎖國論下畢

通篇の大意と案に諸國は中間に連
山河海ありて諸國は中間に浮氣有
りて世界は是れ是れ諸國の諸俗有
り天上より種々殊殊殊殊なるを
あるが如く然るは同一地球と云ふも
必しも諸國皆相通するの理は如何に
皇國を以て吾國の諸國を以て地球の諸國
あると云ふも是れ一箇の小地球なり

是等諸島の人は、若千の漁獲を獲て
通商通交をせしむるに既に國中に
ありて餘り奇觀の樂あり、亦何を必
しとて、大洋の危險を犯して異域に
出づるを以て觀樂とせん、此の業をせしむ
却て不幸なりとはいふべし、但し遂に
此果は不逞なるもの、是れも通商せし
む事能く、皇國の益あり、有るなり

是を完備せしむるに、是れも一件多
け大奇特あり、これと通交を便する所
以り、昔は異域人の不善風俗を残し
て、彼等を侮るに、通交を絶つ所必
なり、然らば鎖國の一件、之よりこれ
大に義あり、利あり、勢なり、明君額り
小部、之よりこの事、安んずる所、
是れ又皇國の皇あり、不敗なる所

揆夫尔ケロシ意蓋しけの如く昔時厄勒祭
亞ヤ代アシキサントル亞助聖埵兒リより大主ウ歐羅巴
法部と從アフリカ（亞弗利加）の諸方と降し
て黑海の海より一十余條の長橋を架
し二三百三十余万の軍を以て攻めり
伯尔齊ヘルシヤ亞國を滅し其大主を奪ひ
又深く東方より印度の諸方と倂吞
し舟車人跡の至る亦西南北各喰せ

にたりしを
今の冀野亦西域のテリノ地ナリ
今此亞助聖埵兒の古跡あり又今
厄勒祭亞の前は伯尔齊亞の代より又昔を
亞支里亞の代より羅媽マ共々四代より
数千里に

地面とて自ら全地都を掌握せり
思へりも僅小四百年より其國羅媽乃
物なり厄勒祭亞の王業成就
孝安二十余年あり凡天下の
各地并隣以來常小万邦窮奪濁水の外
拮据して未タ自ら外國の奴となりざる事

我國れゆくも其の所よりある今
かの魯祭亜人の大なる國を築き北は北海
小界し西は波羅泥亞薩示祭亞は逼り南
は伯爾齊亞は逼り東は遠く東方より
白ひく多る東西諸國の地代併りて子
ルトシンスコイといふ所あり支那は逼
り又我北方はカフスカに至りて我は逼り
むすむる也我は亦も秋は二箇の疾

を情しるふ似たりともかのカムスカ乃
地より既に其の國の去る二千里小
し又我亦も於て海と陸を以て蝦
夷を隔て前後の便利を情と且も彼
は亦玉の都児格國熱尔馬泥亞國等
強大なるに對し内は諸部族那の多る
少くても其の多るるれと遂に其の
伸し我亦も武備堅固上下和合の國也

冠せんとは難から申せ難るる事一こそ
然らうと古人の所謂欲を非患の類
らうとれ、蛇虎かぬとの地も、能治
し通高出入濫放るる人にかゝられ
通らんも中しふも、我國を守護する所
以らう、今予は是書と翻譯するも、
は玩嬉ふ異人、為ふあはれ我輩の如
く難き事、ももも、何難き事、御代

あひく太平は草木と共くは、
而あはれ、
とき、
ち、
れ、
矣、
教、
む、
む、
切、

於て微く得^て益する所ありてんが
ゆゑにん^にあ^るが故

享和元年秋八月

志筑忠雄識

七

三十三